

公園と利用者・管理者をつなぐ「PARKFUL」

PARKFUL Opens Up Possibilities of Parks

梅村 夏子 *Natsuko UMEMURA*

(株)コトラボ

1. はじめに

人と人がつながるためには「場」が必要である。インターネット上にはつながりを生むためのオンラインの場が多数存在し、我々は日々さまざまな人と交流しコミュニティを形成している。一方で、地域生活にはリアルなコミュニティが不可欠である。地域コミュニティは街をよりよくする力を持ち、事件や事故から人々を守り、災害を乗り越える強さを備える。そのような地域コミュニティを生み、育むのはリアルな場である。

本稿で紹介するPARKFUL（パークフル）はIT技術を活用したサービスであるが、そこでつなごうとしているのは人と人ではない。公園と人である。公園はコミュニティの核になりうる。筆者たちは、PARKFULがコミュニティを作るのではなく、公園が核となりコミュニティを作る社会を目指している。

2. コミュニティのための公園とは

メディア等で取り上げられるのは、いわゆる“お出かけ”の対象となるような大きな公園に偏っている。しかし前述のように地域コミュニティの形成を狙いとする筆者たちにとって、最も人々の関心を高めたいのは街区公園である。10万を超える都市公園のうち約80%は街区公園が占める。それこそが地域生活にもっとも密接で、人々の日常に身近な公園といえるであろう。PARKFULはそこに寄り添う存在となる。

3. PARKFULについて

PARKFULはスマートフォン向けの公園情報アプリである。無料で配信し、2017年3月時点で首都圏を中心にダウンロード数は約3万となっている。ユーザーの多くは子育て中の若い親たちであり、子育てにおける公園の重要性とその情報のニーズの大きさがあらためて分かる。ここでPARKFULの特徴を簡単に紹介する。

（1）自治体横断の公園情報

PARKFULでは地図や検索機能で様々な公園を見つけることができる。大きな特徴は、自治体を横断して日本全国の公園を扱っていることである。シンプルなことであるが、公園にとってはそれさえも当たり前ではなかった。PARKFULでは街区公園から大規模公園まで、管理自治体ごとに分散して存在する公園の情報を集約した。利用者は行動範囲を気にすること無く、あるいは転居などをしても変わらずに地域の公園情報を得ることができる。GPS機能を有効化すればどこにいても周辺の公園を手軽に見つけることができる（図-1）。PARKFULはすでにあるものを可視化しているに過ぎない。しかし「見える」ことは人々の行動のはじまりとなる。埋もれた価値を然るべきところへ高める、その第一歩が公園を知ってもらうことにあると考えている。

（2）ユーザー参加型

もうひとつの特徴は、ユーザーが公園の写真やコメントを自由に投稿することができる機能である。公園を探しているユーザーは、だれかが投稿した写真やコメントを公園の参考情報として閲覧することができる（図-2）。これは公園の魅力を利用者自身に発信してもらおうというもの



図-1 アプリ地図画面

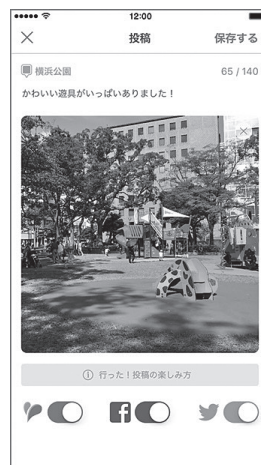


図-2 アプリ投稿画面

で、この機能を利用して公園のフォトコンテストも開催している。また公園の思い出を記録することにもなり、公園への愛着や帰属意識の醸成にもつながると考えている。その他、テーマに沿った公園の紹介や公園イベント情報の掲載など、まずはユーザーが「公園に行ってみよう」というきっかけづくりに取り組んでいる。

4. 「みんなで創る」が持続可能にする

PARKFUL の土台は、「どこにどのような公園があるか」という公園そのもののデータベースである。都市公園に加え児童遊園や自然公園など、掲載公園数は現在 11 万箇所を超えている。この情報を構築・維持していくために、PARKFUL では2つのアプローチを取っている。

まずは自治体との連携である。PARKFUL の取り組みに共感を得られた自治体から、公園の情報提供を受けアプリに掲載している。長野県佐久市ではいち早く連携に取り組んでいただいた。現在、佐久市のホームページに掲載されている公園の情報は、そのまま PARKFUL でも閲覧可能となっている。また神奈川県とは県内全市町村の公園情報のオープンデータ化を協業し、データ整理の作業協力とともに、そのデータを PARKFUL に活用している。

もうひとつはユーザーの協力による情報収集である。未登録の公園や設備情報等を投稿できる機能をアプリ内に設け、訪れた公園の情報が不足していたり間違っていたりした場合に申告してもらうことができる。公園の情報を行政から提供される一方的なサービスとするのではなく、地域のみんなで公園の情報をメンテナンスしていく、情報の「自治」の仕組みを取り入れている。

さらに今後は、公園でイベントを開催したり公園周辺に店舗を構えるような民間の事業者が、PARKFUL を通じて公園を支えていけるような仕組みを作っていきたいと考えている。公園の質向上に向けては官民の連携に期待が寄せられている。地域事業者の出資によって地域全体の価値を高めるような仕組みも存在するが、多くは都市開発レベルで取り組まれる。筆者たちが目指すのはもっとコンパクトに、地域貢献レベルでの公園維持の仕組みづくりである。

このように公園の多様なステークホルダーによる「共創」こそが、公園を持続可能にすると考え、PARKFUL はそのためのプラットフォームを目指している。

5. 公園の質を高めるために

これからの公園について考えるため、筆者たちは国内外の様々な公園の事例を見てきた。とくにニューヨーク、コペンハーゲンといったパブリックスペースが重要な役割を果たしている都市を視察する中、各地の賑わう公園で目に



図-3 子どもも大人も公園で過ごすコペンハーゲンの日常

したのは、多様な人々と多様な過ごし方、そしてそれを受け入れる公園の姿である（図-3）。「どんな公園か」ではなく「どのように過ごすか、楽しむか」という“ソフト”が公園の価値を決める本質にある。子どもの遊び場というだけでなく、マーケットを開いたり、みんなで食事をしたり、あるいはみんなで公園の世話をしたり、コミュニティが自由に活動を行える場としての公園が、地域の日常を豊かにする。

PARKFUL に投稿される写真や声は、利用者の公園の楽しみ方や利用者の目を通じた公園の魅力を可視化するものである（図-4）。そうした“ソフト”の情報は、ユーザーの公園の楽しみ方を広げ公園の可能性に気づききっかけとなるであろう。一方、管理者にとっては公園の利用実態を知る手がかりとなり、ニーズに応じたハード整備へつなげるべき指標になる。だからこそ自治体には PARKFUL を活用してもらいたいと考えている。行政サービスとして公園の情報発信をすることが、結果的に管理者自身が公園を知ることにつながると考えるからである。そこには公園の質を高めるためのヒントがあると確信している。ソフトを軸としたコミュニティのための公園づくりへ、PARKFUL は「情報」と「共創」を通じて貢献する。



図-4 公園の楽しみ方が伝わるユーザー投稿の例

参考文献

- 1) 公園情報アプリ PARKFUL ホームページ (2016) : <https://parkful.net/parkful/>
- 2) 株式会社コトブキ・株式会社コトラボ (2017) : Copenhagen - Public Spaces for Happiness 人々を幸せにするコペンハーゲンのパブリックスペース